

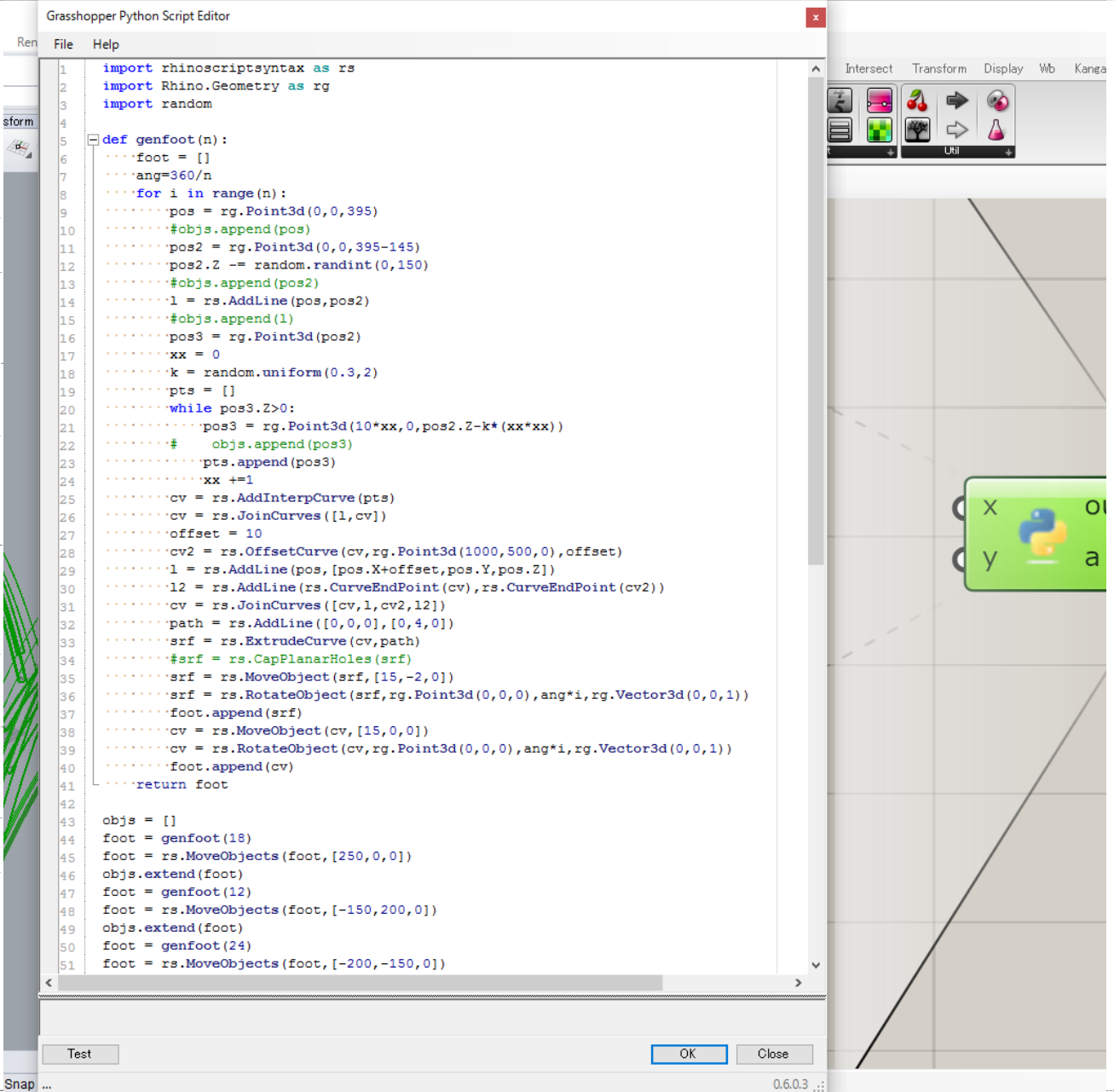


マングローブから着想をえてジェネレートした形。
構造上の理由、組み立ての方法によって上下180度回転させた状態で使われる机となった。
だが、写真を撮る段になって、影が反転し、マングローブになっていた。アクリルの天板は水面へ。

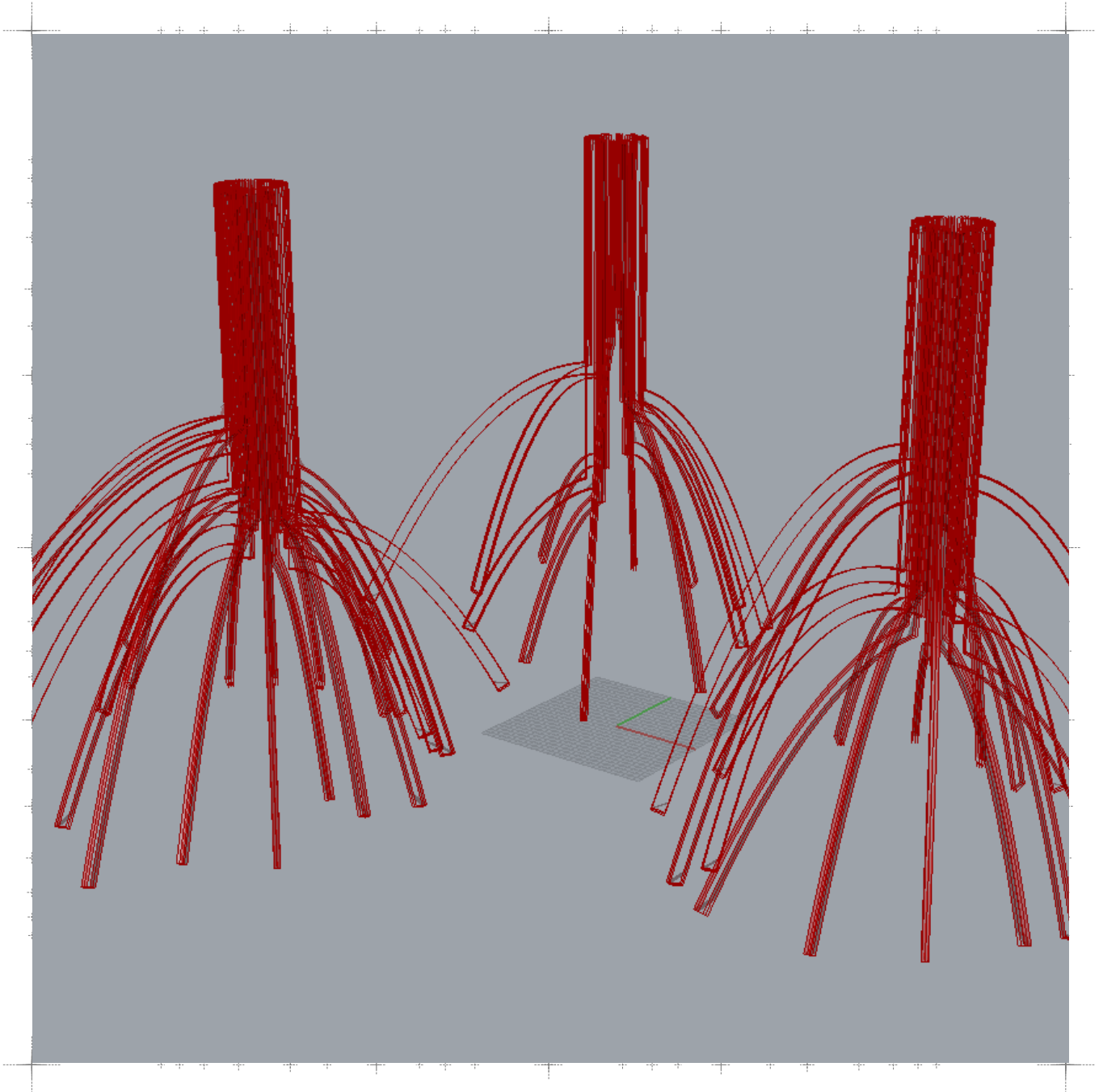


どこか北欧のデザインを感じる曲線。
インドネシアのマングローブの森に生息するエビをイメージしながら制作していたのに。

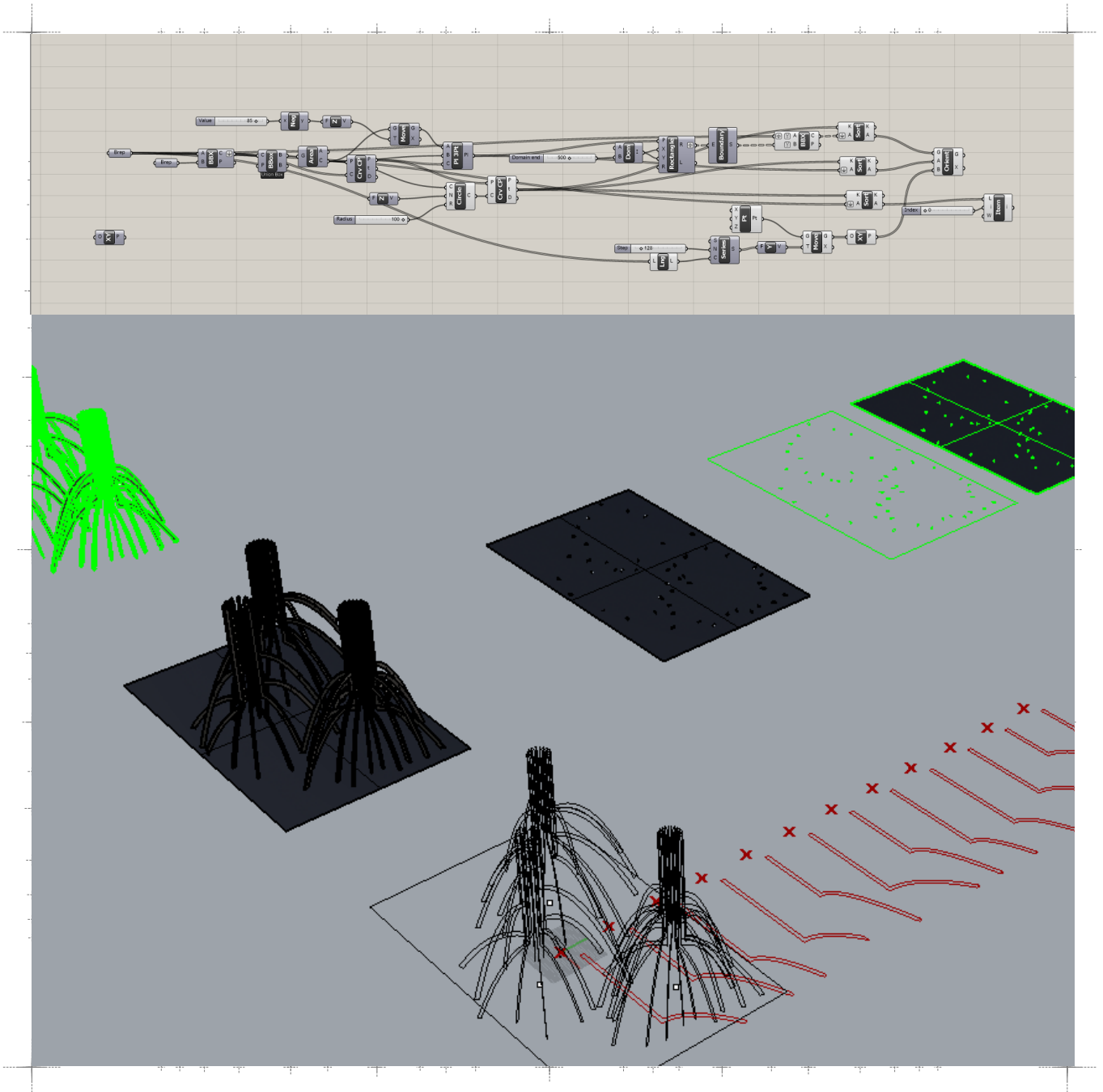
課題1の反省点であった、形に出会いにくいようなジェネレートはできたのだろうか？かなり疑問だが、イメージの反転や連鎖があったのでそういう意味では面白かった。
技術的な意味でもコンセプトの面でも強化する必要を感じたが、楽しんで制作できた。



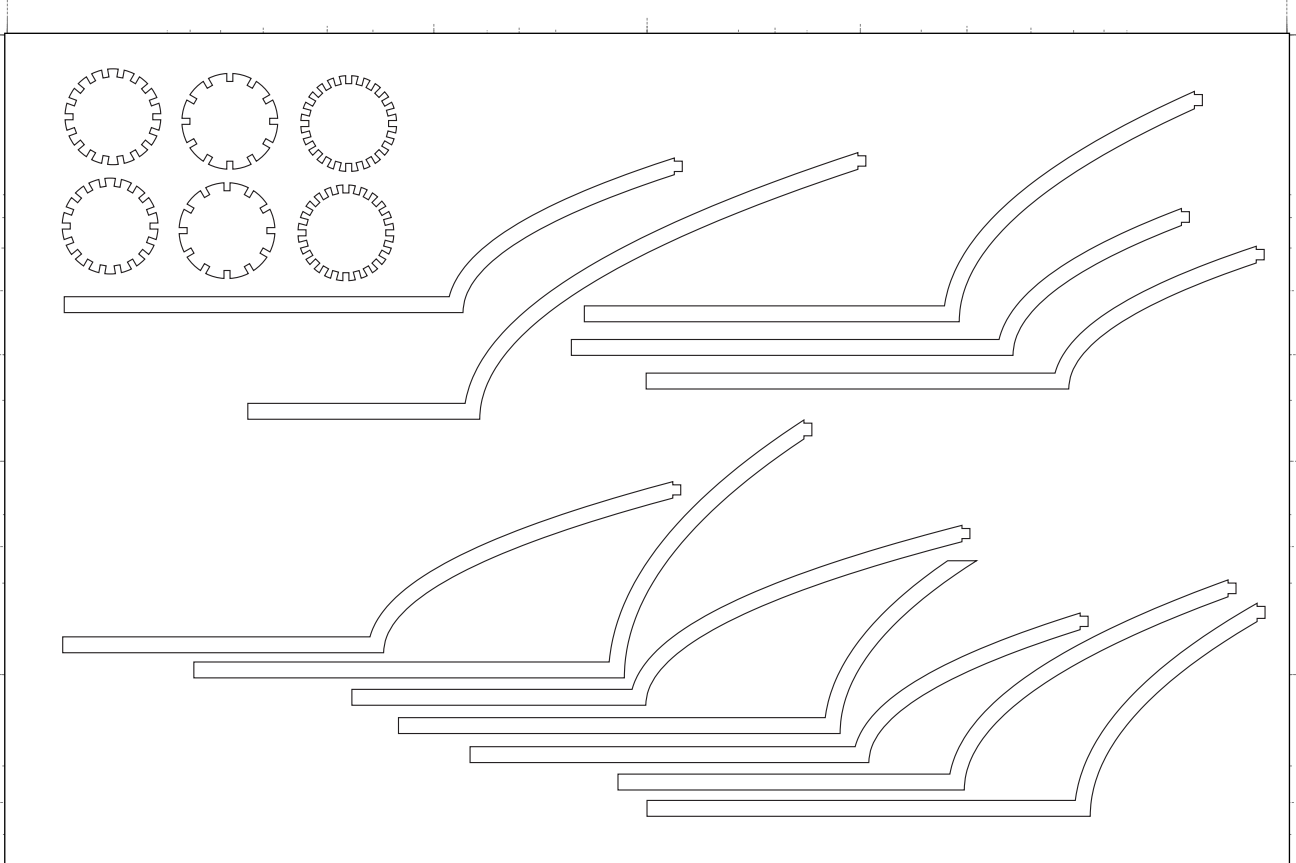
放物線上に天板に吸い付いていくようにコーディングした。



pythonで生成した線を10ミリセットバックした



放射状に生成されたオブジェクトを順番に平面上に配置した。



材料の噛み合わせが抜けずにしっかりはまるよう、データをセットバックした。アクリル盤は0.13ミリ、MDFは0.1ミリセットバックさせた。800×500の材料にできるだけむだがないように配置した。ただし、原点から遠ざかるほどレーザーの出力が弱まるので右下の方には置けなかった。

アクリルの剥離紙を剥がす前、かつ足の塗装前の写真。剥離紙を通して足に落ちる光や、木らしい色にやや惹かれたが焦げ目が形を知覚する上で邪魔にみえたので、黒に塗装した。

組み立てる過程で必要となるディテール、出力する過程でのデータの調整。実際にテーブルとして機能を果たすかどうか。モノとしての美しさ。普段制作している建築の課題やコンペではしばらく考えていなかったことを考えた。